

Φ.И. チュッチェフ政治詩試訳(13)

大 矢 温

はじめに

「Φ.И. チュッチェフ政治詩試訳(1)～(12)」に引き続き、おもにタラーソフ編集のチュッチェフ著作集『ロシアと西欧』¹⁾において「哲学詩」として分類された作品を中心に、チュッチェフの詩作の中から彼の政治思想を分析する手がかりになりそうなものを選び、6巻本の全集をテキストとして訳出を続ける。

1) 村にて²⁾

何事なのか、必死の鳴き声、
そして喧噪、そして羽ばたきは？
誰がこの気の触れたような野蛮な騒ぎを
かくも場所をわきまえずに起こしたのか？
ガチョウとアヒルの群れが
突然逆上し、飛びゆく、
飛びゆく、どこへか、自分でも分からずに、
そして発狂したように大声で鳴く。

何という大椿事となって
これらすべての声は響くのだろう！
犬^{ビョース}にあらず、四つ足の小悪魔^{ベスス}が、
犬に変身した小悪魔が、

暴れ狂って、気晴らしに、
自信にあふれた鉄面皮が、
彼らの荘厳たる平安を乱した
そして彼らを追い払った、追い散らした！

まるで彼自身、彼らを追って、
鬱憤の仕上げのために
自らの強靱な神経を張りつめて
空へと舞い上がり、飛び去りそうだ！
その行動にいかなる意味があるか？
その力の浪費は何のためなのか？
何のためにその脅しはそのような飛行へと
ガチョウとアヒルを駆り立てたのか？

そう、そこに目的がある！怠惰な群れの中で
恐るべき停滞が認められた、
そして進歩のために、必要になった、
宿命的な急襲が、——
そしてほら善なる神意が
この乱暴者を鎖から解き放った、
彼のおかげで宿命がその鳥たちを
最後まで忘れないようにするために。

このように現代の現象の
意味は時として訳が分からない、——
が、現代の天才は
いつでもそれらを説明する用意がある。
ほかの犬は——君は言うだろう——単に吠えているのですが、

一方で彼は最高の義務を果たしているのです、——
彼は、意味づけしながら、展開しているのです
ガチョウとアヒルの意味を！

手稿上の書き込みから1869年8月の領地オーフスツクにおける詩作であるとされている³。池のガチョウやアヒルを犬のロンプが追い立てた、という夏の領地での平凡な日常生活の描写である。犬のロンプの悪ふざけに哲学的解釈を施そうとしている「現代の天才」たる「君」をチュッチェフがからかっているようにも読める。

2) 無題⁴

自然は、スフィンクスだ。
それが自らの技によって人間を破滅させるは、
それはもしかしたら、遠い昔から
そこには謎がなく、なかったが故かもしれない。

この詩もまた、1869年8月の領地オーフスツクにおける作とされている⁵。自然には隠された謎や秘密がない、というチュッチェフの洞察である。とすると、謎がないが故に人は破滅し、死んでいくことになる。人生の有限性、というチュッチェフの初期の詩作に特徴的なテーマの文脈で解釈すべき詩であろう。

3) 現代の⁶

旗ははためくボスフォラスに
砲はとどろく晴れがましく
空は晴天——海はきらめく
そしてツァリグラードは歓喜する。

有頂天になるのも無理はない：

すばらしく美しい海岸に
今、陽気に宴を開くのは
心優しきパディシャー⁷だ。

そして彼は盛大にもてなす、
親愛なる西方の友人たちを、
そして自分のすべての主権をば
彼らのために質草にしかねないのだ。本当に。

考えも及ばぬ遠方より、
彼らのフランク人の土地から、
その予言者の勘定でちょっと興じに
彼らは皆ここにやって来た。

大砲の轟きと楽の音！
ここは全ヨーロッパの停泊所、
ここで全世界の勢力が
自らのカーニバルを祝っている。

叫びと共に熱狂した
活気に満ちた西欧の大酒宴は
秘められたハーレムに於いてさえも
扉を開け放った。

二つの海の素晴らしい山々の
この豪華な粋組みの中で
かくもキリスト教徒の公たちのつどいは

イスラムを楽しむのか！

彼らの挨拶に終わりはない、
兄弟は兄弟を抱きしめる…
おお、いかなる歓びの光で
西の星は輝くのか！

そして最も明るくとおしく
そこに一つの星が光る——
戴冠したる妖精、
ローマの娘、その妻が⁸。

あらゆる優雅さと装飾の
悪名高き舞台から——
第二のクレオパトラのごとく
威容あふれる客人たちの群れの中、

東に彼女は現れた
皆への悪ではなく歓びのために。
そして皆は彼女の前で頭を垂れた：
西から太陽が昇ったのだ！

ただ谷や山に
影が漂うところだけは
そしてこの叫び、この喧噪が
届かぬところだけは——

ただ、影が漂うところだけは、

夜に——生傷から
 血がどろりと流れ出すところだけは
 何百万ものキリスト教徒の。

この詩のテーマになっているスエズ運河の開通、およびこの詩が最初に発表された新聞『声』の日付（旧暦1869年10月15日）から「1869年10月前半の作」とされている⁹。まず、時代背景を含め、この詩の背景について若干まとめておきたい。

この時期、ロシアの外交課題は、1856年のパリ講和会議に於いて黒海の中立化および両海峡の通行制限を含む屈辱的な内容で受諾させられたパリ条約の撤廃にあった。結局このパリ条約は、1970年からの普仏戦争におけるフランスの弱体化を見越した外相ゴルチャコフが一方的に廃棄を宣言し、プロシアの助力によって国際的にその内容が認められるまでロシア外交の宿痾となったのであった¹⁰。クリミア戦争に対する英仏の介入によって、この時期、ロシアは「臥薪嘗胆」の苦汁を嘗めていたのであった。

さて、フランスとスエズ運河について振り返ってみると、1789年のエジプト遠征時にナポレオン・ボナパルトが古代エジプト時代の「運河の遺跡」を発見したと言われているので、フランスはスエズ運河に浅からぬ因縁を持っていると言える。そのフランスをエジプトから撃退したのがイギリスとオスマン帝国であった。このような形で名目上はオスマン帝国の一部となったエジプトだったが、実際はムハンマド・アリーが太守としてムハンマド・アリー朝を開き、オスマン帝国に対しては独立を志向していた¹¹。

このように複雑な国際状況の中で多大な資本と犠牲を伴いつつもスエズ運河はエジプトとフランスの協力によって達成されたのだった。開通式典が催されたのは1869年11月17日。フランス皇帝ナポレオン三世の皇后、ユージェニーはもちろんのこと、オーストリア皇帝やプロシア皇太子フリードリッヒ・ヴィルヘルム（後のフリードリヒ三世）など、ヨーロッパ列強から皇室関係者や高位高官が集まって運河の地中海側の入り口であるポートサイドで盛大な祭典が繰り

広げられたという。

他方、スエズ運河建設運動の中心的な人物は、そのムハンマド・アリーの子で後に太守となるサイドの少年時代の師傅、フェルディナンド・レセップスであった。彼はフランス皇帝ナポレオン三世の皇后、ユージェニーを通じてフランス政府に運河建設を訴えると共に、サイド・パシャからは彼の即位の1854年にスエズ運河建設の許可を得、続く1856年にスエズ運河株式会社の許可を得ている。また、レセップスはサン・シモン主義者としても知られている。運河開削はサン・シモンの理想であった産業者の時代を開く事業でもあったのだ¹²。

ここでチュッチェフの詩に戻る。底抜けに明るい南国の風景を背景に、スエズ運河の開通が祝われている。ただし、チュッチェフの詩ではスエズ運河開通式典はエジプトのポートサイドではなく、トルコ帝国の首都、イスタンブール（ツァリグラード）で行われていることになっている。また、式典の主催者も実際の主催者、エジプト太守イスマイル・パシャではなく、トルコ皇帝（パディシャー）ということになっている。詩作が式典の前に書かれていることから、チュッチェフが誤った情報のもとに詩を書いた可能性も捨てきれないが、外交通のチュッチェフがそのような単純な誤りを犯すとは考えにくい。むしろ、意図的にスエズ運河とボスフォラス海峡を混同し、二重写しにした作為、とも考えられる。そのように解釈すると、最後の12聯目と13聯目がそれまでと違って変わって暗い色調で彩られることが理解できよう。チュッチェフにとってスエズ運河におけるフランスとエジプトの協力は、クリミア戦争における英仏のトルコへの助力に重なっているのである。

そもそもチュッチェフの世界認識に於いて、ヨーロッパとは、西と東があるにしてもキリスト教が支配する領域であった。それに対してトルコやエジプトといったイスラム圏はヨーロッパの外の世界である。言ってみれば国際政治におけるロシアとフランスとの対立は、ヨーロッパという内輪のもめ事である。それに対してフランスがヨーロッパの外の、つまりヨーロッパ全体が敵対すべきイスラム圏と結託したことがチュッチェフには許し難かったに違いない。と

いうのも、この詩の1聯目から11聯目までの明るい祝祭的な調子が一変するのは、「西の星」、「ローマの娘、その妻」、「第二のクレオパトラ」と謳われたフランス皇后ユージェニーが「東」に現れた時である。「西から太陽が昇ったのだ!」と、ここでチュッチェフは有ってはならないことが起きたこと、自然のコスモスが破壊されたことを宣言する。つづく12聯、13聯は、スエズ運河開通という明るい出来事にまつわる、メダルの裏側の描写である。つまり、フランスの助力によってトルコが国力を回復する結果、トルコ領内のスラヴ系諸民族の解放が遠ざかること、そしてスラヴの民族性を梃子としたロシアの南進政策が挫折すること、への危惧である。

4) A. Ф. ギルフェルチンクへ¹³

取り急ぎお祝い申し上げます。私たち喜んで
あなたの不成功¹⁴を歓迎します。
あなたにとって賞賛に値し、名誉で、
みなにとっては教訓となります。

かくも長年ロシアの言葉によって
あなたがロシアに素晴らしく奉仕したこと、
このことをあまねく天下が知っています、
知らないのは血を分けたドイツ人だけです¹⁵。
おお、いや、彼らもまた知っています——
スラヴ人の敵意に満ちた世界に於いて
あなたはやり遂げた——あなた一人が、——
すべて彼らには分かっているのです——*inde irae!*¹⁶…

この偉大な地方に於いて
彼らはあなたに一度ならず出会ったのです、

Φ. Ⅱ. チュッチェフ政治詩試訳(13) (大矢 温)

バルカンで、チェコで、ドナウで、
至る所、至る所であなたと出会ったのです。

変化無しで、できましようか
今もなお高潔勇猛な、
アカデミーの塀の中に、
彼らの至聖の砦の中に、

その名誉ある防御のために、
あなたを、あなたを入れられましようか——
ロシアの公金で賄われた
勇猛無敵のドイツ人守備隊は？

チュッチェフにとってギルフェルヂンクはスラヴ慈善協会の活動などを通じた友人であり、汎スラヴ主義の同志である。この詩は、ギルフェルヂンクが1869年にロシア科学アカデミー会員の選挙に落選したおりに彼を慰めるために書かれたものである。事の次第はニキテンコの日記が詳しい。科学アカデミーにおいて会員の空席ができたために補欠選挙が行われた際に、「スラヴ派」の支持を集めてギルフェルヂンクはこの候補者になったのだが、「ロシア愛国主義に対するドイツ人の陰謀」のために落選した、とのことである¹⁷。この事件から程なく、1872年に彼が病死した際にもチュッチェフは彼を悼んで詩を作っている¹⁸。

5) アバザーへ¹⁹

かくのごとく——ハーモニーの道具の
心を動かす力は果てしない、
そしてすべての生ある人は愛する
その暗いが、母なる言葉を。

そこでは何かが呻いている、何かがあがいている、
枷につながれた魂のごとく、
自由を求め、もがいている、
声に出して発言したがっている…

全くあなたの歌声によるでもなく
私たちが自らの中で感じるのでもない：
そこには完全な解放があり、
虜囚と戦いの終わりがある

辛い苦境から抜け出して
すべての枷を解きながら、
全くの自由の身で歓喜する
解放された魂は…

万能の呼び声によって
光は闇から分かたれた
そして我らは音ではなく——生きた魂を、
音の中にあなたの魂を我らは聞く。

アレクサンドルⅡ世政府内の開明派官僚として知られるA. A. アバザーの妻で音楽家・歌手のユーリヤ・フォードロヴナ²⁰に捧げられたもの。彼女の美声を褒め称えた内容になっている。詩の手稿にはエルネスチナ・チュッチェヴァの筆跡で1869年11月22日の日付が記入されているが、これは「12月」の誤りであるとされている²¹。第5聯に「光」と「闇」、「音」（振動）、「魂」といった、初期の詩作におなじみの諸用語が登場している。

6) 無題²²

かくのごとく**神意**は運命づけた、
偉大なる**スラヴ**のツァーリの
来るべき威光が
全地に宣言されるであろう
全能の雷の声にあらず、
蚊の羽音の響きによって、と。

手稿には妻のエルネスチナ・チュッチェヴァの筆跡で「11月27日」、および「ギルフェルデンク」の記入があるが、何年の作かは不明で「筆跡の性格から60年代」の作、とされている²³。ギルフェルデンクの名が登場しているところからも、汎スラヴ主義的な意図を持って書かれたものと推察される。武力ではなく、言葉によるスラヴ諸民族の糾合、という思想であろう。これはドイツ民族は「鉄と血によってのみ団結」すべし、としたビスマルクの鉄血政策に対して、我々は「愛にて団結してみよう」と謳った1870年の「ふたつの統一」²⁴に通じる思想でもある。

7) 無題²⁵

至上の命に従う我ら、
*思想*の歩哨に立ちながら、
意気は上がらず、
両手で二連銃を持つといえども。

我ら不本意ながらそれを持つ、
脅すことは希にして、むしろそれを帯びて

懲罰隊ではなく、儀仗隊の
警備の任に赴いた。

チュッチェフは1858年から外国検閲委員会の議長を務めているので、その職務に関する詩作と解釈するのが自然である。外務大臣ゴルチャコフに宛てた上奏文「ロシアにおける検閲」²⁶に於いても検閲の厳格化ではなく緩和によって革命思想を論破すべきと主張しているところからも²⁷、外国検閲委員会においても「儀仗隊」として検閲行政を行っていたことが伺える。

8) 無題²⁸

ジーズニ
生が我らに何を教えても、
それでも心は奇跡を信じる：
不滅の力はある、
不朽の美はある。

地上の枯凋は
天上の花に手を付けない、
真昼の暑さによって
そこに露はおりない。

その信仰は欺かない
それのみによって生きる人を、
ここで咲いたすべてが、しおれるわけではない、
ここにいたすべてが、過ぎゆくのではない！

しかしこの神恵の信仰は、少数者のもの
達することができるのは、

厳しい人生の試練の中で
あなたのように、愛しながら、苦しめる人のみ、

自らの受難によって
他人の病を癒すことのできる人のみ、
友人のために精魂を傾け
最後まで耐えられる人のみ。

当時親しかったアレクサンドラ・ヴァシリエヴナ・プレトネヴァに捧げられて1870年に書かれたものとされている²⁹。最晩年のチュッチェフが、キリスト教信仰にすがっているようにも読めるが、「苦しめる人」たる彼女が何に苦しんでいたのかは不明。

9) 無題³⁰

兄よ、長年私に連れ添った、
君は去った——我らすべてが行くところへと、
私は今——山の高みにいる
一人立つ、——そしてあらゆる空虚が至る所にある——

独り身にとって永くそこに立つべきか？
一日、もう一年——むなしいだろう
私が今いるところは、夜の闇の中を見つとも
——私の元にあるのが何か、自分でも分からぬままに…

すべては跡形もない——なんと無くなることは易きことか！
私がいようがいまいが——それにどんな用があるのか？
すべてはそのままあるだろう——そして吹雪は吠えるだろう

そして同じ闇が——そして同じ荒野が至る所に。

1870年12月8日に親しかった兄のニコライが亡くなり、その直後に書かれたもの。この年の7月には息子のドミートリを、そして翌年6月には娘のマリアを失うことになる。最晩年のチュッチェフは、度重なる喪失を味わっていた。

10) パチカンの1周年³¹

裁きと断罪の日があった——
その運命づけられた、決定的な日が、
その時——さらに転落するために——
彼は上がった最上段に——

そして神の厳格な摂理によって
その高みに追いやられた、
彼は自らの不可謬の足で
無底の虚無へと歩を進めた——

その時、他の情欲に忠実な、
闇の力の玩具にして生贄たる彼は
かくも流神的に善良そうに
自らを神だと宣言した…

新たな神人について
たちまち箴言が作られた——キリストの教会は
俗界に入り、聖物冒涇の後見に
委ねられた

おお、いくつの混乱と動乱を
今日までにその不可謬者が起こしたか、
その論争の嵐のもとで
いかに冒涇が熟し罪への誘惑が成長することか。

突然我に返って、これらすべての民族は
慌てふためき *神の真実* を探し求める、
いかに千年の嘘により
彼らにとって、それがすっかり害されたことか。

彼らは克服することができない
彼らの血管の中を流れる、その毒を
彼らの最も聖なる血管の中を、
永く流れるであろうその毒の——源はいずこ？

.....

いや、いかに不屈に格闘しようとも、
嘘は道を譲り、空想は四散するが——
が、バチカンのダライラマは、
キリストの代官たれと召命されていない。

1869年12月から1870年10月にかけて教皇ピウス9世の招集によって開催された第1バチカン公会議の1年後に書かれたもの、とされている²⁹。全集のテキストは1872年に新聞『市民』に発表されたものを底本にしているが、すでに手稿の段階で第8聯目が「…」になっているのはこの詩が公表されることを前提にした検閲上の配慮と考えられる。この第1バチカン公会議に於いては、教皇不可謬の教義が採択されているので、このチュッチェフの詩もピウス9世の教

皇不可謬説を批判したものとして読むべきである。

一般にこの教皇不可謬説は、自由主義や社会主義、そして民族独立運動に揺れる19世紀後半ヨーロッパの政治状況に危機感を抱いたピウス9世の側からのイデオロギー的反撃の一環として捉えるべきだが、他方、この教皇不可謬説はカトリック教会の内部にも敵を作る結果となった。不可謬性に対し、これに反対したドイツ語圏のカトリック教会が反教皇カトリック反対派を形成したのであった。さらにこの反対派はカトリックを破門されたミュンヘン大学学長で神学者のヨハン・イグナツ・フォン・デリンガー（1799-1890）らの提唱によってミュンヘンで会議を開催し、そこでローマから独立した「復古カトリック教会」の設立を宣言したのだった。

「西」のヨーロッパを構成する要素としてローマ教会を重視してきたチュッチェフもこの動きを注視しており、この会議については1871年9月14日付の妻宛の手紙で言及している³³。

「昨日、電報で我々に、今ミュンヘンで行われている復古カトリック教徒の集会の名でデリンガーと3-4人の権威有る名士によって署名されて出された印刷広報の内容が伝えられました。この書類に於いて始めて東方教会に対して呼びかけられ、それとの合意が、可能で望ましい事実として示されています。つい最近、コンスタンチン大公のイニシアチブによってこちらからミュンヘンのデリンガーのもとに誰かが派遣されたのは確実なことです。そしてその誰かとは、我々の友人、オシニンです。」

この「オシニン」なる人物は、ペテルブルク神学アカデミー教授で西方教会史の専門家であるN. T. オシニン（1833-1887）のことである。この会議にむけてはロシア側からコンスタンチン大公によってミュンヘンへと派遣されている³⁴。オシニンは正式な代表ではなかったにもかかわらず、ロシア正教の代表者として「すべての反ローマのカトリック党」に歓迎されたという³⁵。

話題をピウス9世とチュッチェフに戻すなら、一般にピウス9世は、市民革命に揺れる19世紀後半のヨーロッパに於いて、その『誤謬表』を示すことによ

って教義上の引き締めを図り、よってローマ教会の権威を復興しようとしたことで知られる。しかし、チュッチェフにとって『誤謬表』の誤謬は、それがヨーロッパで進行中の自由主義的傾向を敵視したことにあるのではなく、むしろローマ・カトリックを絶対化し東西教会分裂の責任をローマ教皇にあることを否定しているところにあったと考えられる。また、同じ意図を帯びてピウス9世によって64年に『誤謬表』と同時に発せられた、「良心の礼拝の自由」を否定する回勅『現代の誤謬の排斥 Quanta cura』に対してチュッチェフはその詩「ENCYCLICA」において「変節のローマで／キリストの偽代官に罪が下る」と厳しく非難している³⁶。チュッチェフにとって東西両教会の分裂は「神の手になる」教会の上に「人の手によってもたらされた傷」であった。

とはいえ、チュッチェフはローマ教会自体は否定していない。ローマ・カトリックといえど普遍教会の伝統を受け継ぐ以上「キリスト教の原理は決してローマ教会に於いて死滅していない」からである。必要なのは大分裂以来「800年間止まることなく出血してきた開いた傷口」³⁷を癒し東西両教会を合一することである。ちなみに、かつてチュッチェフは48年の革命的動乱に揺れるヨーロッパの中で執筆した『ローマ問題』(1849)において、その役割を「正教皇帝」に託している。

しかし『ローマ問題』執筆時のロシア皇帝ニコライ一世にしてもこの詩作の時の皇帝であるアレクサンドル二世にしても血統的にはドイツ系である。あえていえば「西」の「種族」である。一見、「西」の「種族」が「東」の教会の長を務める、という矛盾した図式になる。しかし、チュッチェフの構想する「帝国」を全ヨーロッパを覆う領域である、と捉えると、この矛盾は説得的に説明できるように思われる。東西両教会の合一に関連して「帝国」を(ドイツも含めた)東西両ヨーロッパを統合する概念として捉えるのなら、その皇帝がドイツ系でも何の矛盾もない。つまりチュッチェフはそのドイツ人皇帝を単に「東」の正教の皇帝としてではなく、「西」の教会たるローマ・カトリックを含めた東西普遍教会の全地皇帝を見ているのである。このようにしてみると、一般に汎スラヴ主義者として知られるチュッチェフではあるが、彼はスラヴの民族性

を紐帯とした汎スラヴ主義を越えて、普遍教会のもとに全ヨーロッパを統合しようという「汎ヨーロッパ思想」をも展望していることになる³⁸。

注

- 1 *Тарасов Б. Н.* сост. *Ф. И. Тютчев: Россия и Запад.* М., 2007.
- 2 *Тютчев Ф. И.* «В деревне» // Полное собрание сочинений и письма в шести томах. М., 2002-2004 (в дальнейшем “Тютчев”). Т. 2. С. 204-204.
- 3 “Комментария” // Там же. С. 567.
- 4 «*** (Природа – Сфинкс)» // Тютчев. Т. 2. С. 208.
- 5 “Комментария” // Там же. С. 570.
- 6 «Современное» // Там же. С. 210-211.
- 7 「君主」(パシヤ)の上位の概念で、この場合はトルコ皇帝アブデュルアジズ。
- 8 ナポレオン三世の妻、ウジェニーはカトリック教徒である。
- 9 “Комментария” // Тютчев. Т.2. С. 571.
- 10 大矢「チュッチェフと東方問題」、『ロシア思想史研究』2007年、第4巻、265頁参照。
- 11 ロシアはエジプト太守ムハマンド・アリーによる1831年から33年の対トルコ「反乱」の鎮圧に手を貸し、その見返りに1833年のフンカール・イスケレン条約で両海峡の独占的通行権を手に入れている。大矢「クリミア戦争とゴルチャコフ外交」、『法学新報』平成12年第107巻3・4号、103頁参照。
- 12 五島茂・坂本慶一「ユートピア社会主義の思想家たち」、『世界の名著続8』中央公論社、昭和50年、48頁参照。
- 13 «А. Ф. Гильфердингу» // Тютчев. Т. 2. С. 212.
- 14 ギルフェルチンクは1869年12月に「ドイツ人の陰謀」によってアカデミー会員の選挙に落選している。“Гильфердинг, Александр Федорович” // *Русский биографический словарь.* М., 1916..
- 15 スラヴ学者でスラヴ慈善協会でも活躍したアレクサンドル・フォードロヴィッチ・ギルフェルチンク(1831-1872)の家系(Hilferding)は、18世紀の初めにドイツからモスクワに移住してきたとされている。民俗学者としてはロシアのプリーナンの収集で成果を上げ、1870年にはロシア地理学協会民俗学部門の議長に選出されている *Там же*。評論家としてはスラヴ民族問題の専門家として『モスクワ通報』や『ロシアの談話』などに汎スラヴ主義の立場から寄稿している。1872年にオネガ湖周辺を研究調査した際に腸チフスに感染し、それがもとで病死している。イヴァン・アクサーコフが彼の死を悼んで1873年のロシア文学愛好会の会議の席上で彼の略伝を含む弔辞を読んでいる。*Аксаков К. С., И. С.* «Речь о А. Ф. Гильфердинге, В. И. Дале и К. И. Невоструеве» // *Литературная критика.* М., 1981. С. 256-262.

- 16 「ここから憤りが」羅。
- 17 См. *Никитенко А. В.* Дневник от 28 декабря 1869 года. Государственное издательство художественной литературы, 1956. Т. 3. С. 162
- 18 «*** (Хоть родом он был не славянин...)» // Тютчев. Т. 2. С. 259.
- 19 «Ю. Ф. Абазе» // Там же. С. 213.
- 20 旧姓は Штубе。大公妃エレナ・パヴロヴナが「ドイツから連れてきた」という。См. *Тютчева А. Ф.* Дневник от 11 октября 1858 года // Воспоминания. М., 2000. С. 302.
- 21 “Комментария” // Тютчев. Т. 2. С. 573-574.
- 22 «*** (Так Провидение судило...)» // Там же. С. 214.
- 23 “Комментария” // Там же. С. 575.
- 24 «Два единства» // Там же. С. 221.
- 25 «*** (Вельню вышнему покорны...)» // Там же. С. 222.
- 26 “Lettre sur la censure en Russie” // Тютчев. Т. 3. С. 96-108.
- 27 大矢「Ф.И.Чюцчѣфと検閲改革」、1994年、北海道大学スラブ研究センター『スラヴ研究』第41号、参照。
- 28 «*** (Чему бы жизнь нас не учила...)» // Тютчев. Т. 2. С. 223.
- 29 “Комментария” // Там же. С. 587.
- 30 «*** (Брат, столько лет...)» // Там же. С. 226.
- 31 «Ватиканская годовщина» // Там же. С. 232-233.
- 32 “Комментария” // Там же. С. 596.
- 33 Письмо Э. Ф. Тютчевой от 14 сентября 1871 года // Ф. И. Тютчев: Сочинения в двух томах. М., 1984 (далее “Тютчев 1984”). Т. 2. С. 255-356.
- 34 См. “Комментарий” // Тютчев. Т. 6. С. 557, Тютчев 1984. Т. 2. С. 419.
- 35 Письмо И. С. Аксакову от 2 октября 1871 года // Литературное наследство. М., 1988. Т. 97. Кн. 1. С. 369-370.
- 36 大矢他「Ф. И. Чюцчѣф政治詩試訳(3)」、『文化と言語』第65号、2006年11月、207頁参照。
- 37 См. «La question Romaine» // Тютчев. Т. 3. С. 73.
- 38 См. *Цимбурский В. Л.* “Тютчев как геополитик” // Общественные науки и современность. 1995, №6.

(本研究は、科研費(基盤研究(B)21330030)の助成を受けたものである。)